

小田桐孫一の思想（3）

—教育思想の変遷—

高橋 信進*

The thought of Magoiti Odagiri (3)

— The transition in thought of education —

Nobuyuki TAKAHASHI

Key words: 教育思想 thought of education
人間教育 humanistic education
非行の原因 causes of delinquency
第二の啓蒙 second enlightenment
長部日出雄 Hideo OSABE, the novelist

概要

教育の根底に、最も重要なものとして何が置かれるべきか。

小田桐孫一は、そこに「人間愛と世界平和」を置いた。それらは、自己の厳しさ、謙虚さ、他人への愛惜、平和を希求する心などの形をとる。

本論は、小田桐孫一が教育者としてまた思想運動家として、何を考えどのように行動したか、小田桐が語った講話、残した評論等から、その変遷を探究したものである。

1 はじめに

小田桐孫一先生(以下、小田桐と言わせていただく)は、青森県における教育家であり思想運動家である。

官立弘前高等学校、東京帝国大学文学部を卒業後、国立多摩少年院補導員として勤務した。

その後、約30年にわたり教職(教員、校長、教育長)の道を歩んだ。教育家として津軽地区の教育に大きな影響を与え、多くの人材を育てるとともに、一方で石原莞爾の提唱した「東亜連盟思想」の運動家として、その思想の浸透に力を注いだ。(詳細は、拙論「小田桐孫一の思想

(1)」「小田桐孫一の思想(2)」で述べた。)

本論は、小田桐が各教育現場で児童生徒や教員に対し何を語ったか、また根本にある教育思想の実践についてどのように行動したか、などについて探究したものである。



小田桐 孫一

* 東北女子大学 (非常勤)

(1) 教育を行う (着任年、期間)

- ①国立多摩少年院補導員(1936年、7か月)
＜その後文藝春秋社記者、7年＞
- ②県立弘前中学校教諭(1944年、6か月)
＜その後応召、カザフスタンに抑留、
4年1か月＞
- ③県立弘前高等学校教諭、教頭(1949年、
11年)
- ④弘前市立実業高等学校長(1960年、8年)
- ⑤県立弘前高等学校長(1968年、4年)
- ⑥藤崎町教育委員会教育長(1977年、5年)

(2) 教育を書く

- ①「石の言葉」(1964年)
- ②「風塵抄」(1966年)
- ③「草沢の心」(1971年)
- ④「鶏肋抄」(1972年)
- ⑤「随心ノート(遺稿集)」(1983年)
- ⑥小論文;同人誌「道標」(約30編発表)
(1950年)
東奥日報「教育みちのく章」等(9編発表)
(1981年)

(3) 教育を語る

小田桐は教壇の上から、人としての生き方を説いた。

多くの生徒たちはこの思想に触発され、それを人生の大きな支えとして世の中に巣立っていった。小田桐はそれらの中から印象に残った式辞等を磁気テープに記録し、残している。

2018年、筆者等は書斎の片隅に置かれていたこれらのテープをCD化し、公開することができた。

その内容の主なものは、次の通りである。

- ① 弘前市立実業高等学校開校式の式辞
- ② 弘前高等学校に異動するに当たって思うこと、歌
- ③ 弘前高等学校を退職する際の卒業式の式辞
先生の肉声から、生徒に何を伝えようとしたか、

どのような生き方が望ましいと考えたか、先生の教育観・人生観に直接触れることができる。

2 国立多摩少年院にて

小田桐の教育者としてのスタートは、多摩少年院の補導員として非行少年の矯正指導から始まる。勤務したのはわずか7か月間であるが、後日、評論「少年の非行化に思う」の中で「私はここで得難い体験をした」と述べている。そして、少年非行の原因として次の2つを力説している。

(1) 素質の環境化による非行

「少年非行の原因は素質か環境か」の問題は、法曹界においても児童心理学の視点からも、古くて新しい問題であり、多摩少年院においてもこの壁に突き当たった。

しかし、直面する少年の反乱を見れば、古典的な二者択一論では片づけられない。今日の社会では、素質が大きく環境化しているのを見ることが妥当である。つまり、本来子供が持つ善なる素質も、環境の影響で、悪といわれる素質に変質すると見るのが妥当であると考えられる。

(2) 日本の無道大国化が原因

校内暴力など「少年の反乱」の底には、社会的な原因がある。社会はその原因を「親の過保護」のせいにするが、そうではない。親を含む大人自身が豊かな社会に甘え、過保護の状態にあるからではないか。そしてその根底に、日本が経済大国と称しながら、善悪・真偽の正しい境界を知らない「無道大国」になっていることがある。その病巣が、弱い子供たちの非行化症候群として顕在化している。

小田桐は教職人生を通して「多くの教育問題は、社会の在り方に起因する」という考え方を主張した。その思想の萌芽が、若いこの段階から見られるのは注目される。

多摩少年院は、京王線山田駅を降りた小高い丘陵の上にある。16～21歳の非行歴を持つ少

小田桐孫一の思想（3） —教育思想の変遷—

年達約 200 人を教育する更生施設である。昔の武蔵野を思わせる広葉樹林の中に、白い塀で囲まれ建てられている。

筆者は 2012 年、小田桐が最初に勤務したこの施設を訪れた。事務室で庶務課補佐の関さんを紹介され、次の 2 点を尋ねた。

①1936年頃、小田桐孫一という人物が働いていたか。

②何か書いたものなどが残されていないか。関さんは、記録は残されていないと答えた。

塀の中から「1, 2, 1, 2・・・」と叫ぶ少年達の元気な声が聞こえた。剣道の切返しでもやっているような、規則正しい掛け声であった。このような少年達との向き合いが、小田桐の弱者に寄り添う教育観を育むことになる。

作家の野坂昭如が 1947 年頃、この施設に約 1 か月収容されていた。飢餓のため盗みをくり返し、逮捕されたためである。敗戦直後に 1 歳 3 か月で死亡した妹・恵子との体験が「火垂る(ほたる)の墓」として出版されている。

3 弘前中学校にて

(1) 学校と思想学習会の二重生活

1936 年 12 月、小田桐は恩師であり哲学者の和辻哲郎の紹介で文藝春秋社の入社試験を受け合格した。1937 年 1 月から雑誌編集者として、第二次世界大戦の前兆となる盧溝橋事件の情報収集に奔走することになる。

小田桐は文藝春秋社に約 7 年間勤務し、多くの記者仲間や文藝人そして郷土の先輩佐藤正三と出会った。ここで、その後の人生の支柱となる社会経験と、世界を考える際の思想の基点となる「東亜連盟思想」を学ぶことになる。

1944 年 3 月、津軽地方における東亜連盟運動の不振に対処するため、同郷の先輩伊東六十次郎から郷土に帰るよう促され、同志の大谷誠蔵とともに弘前に帰った。同年 4 月から、母校「県立弘前中学校」に勤務する。昼は学校で社会科教員として生徒に教え、夜は各地の思想学習会で同志と共に学び合う、という二重生活が始まった。

当時の気持を東奥日報刊「月刊東奥」に、次のように書いている。

「私は教師になるつもりで帰郷したのではなかった。東亜連盟思想の肉体化を通して若い同志と共に、分会運動の堅固な素地を作るのが使命であった。一方で、雑誌記者が中学校教師になるのは、最も必然的な今日の生き方だと信じていた。」

小田桐が弘前中学校で生徒を教えたのは、わずか半年であった。1944 年 10 月召集令状を受け、海を渡って満州電信第一連隊に入隊する。

(2) 養生学を通じた青少年の育成

津軽では、青年同盟の集い「養生会」が開かれていた。

青少年たちは、郷土の開業医である伊東重先生が著した「養生新論」を基本に、養生の理—脳力・体力・資力—を生命力の三大要素と教える「養生学」を学んでいた。

伊東重は、個人の生命力の発展と民族的生命力の発展を結び付け、民族主義が民族協和へと進み「世界一家・人類同胞の実現に至る」と説いていた。

小田桐は、養生学の深化と東亜連盟思想はその根本思想において一本の本流に流れ込むものと考えた。養生学と東亜連盟思想の一体化こそが、郷土における青少年を新興の機運に導くものであり、その実践こそが自分の果たすべき新しい使命と考えるようになった。

4 シベリア抑留にて

小田桐孫一が終戦を知ったのは、満州国奉天(現瀋陽)の兵舎の中であった。

1945 年 9 月、武装解除後に軍事捕虜として、シベリアの雪野原を約 1 か月間、拘禁車(走る留置場)で連行され、カザフスタン共和国カラガンダで探鉱労働に就かされた。1949 年 10 月、収容所(ラーゲリ)でのあしかけ 5 年の抑留生活を終えて、舞鶴港に到着した。ここでの極限の生活を、「草沢の心一日付のない曆」の中に書いている。

(1) 座敷作者として筆を動かす

5年間の抑留生活のうち前半の2年間は、飢餓状態にさらされ、生死をさまよう毎日であった。抑留者の約1/3が死亡したという記録もある。しかし後半の3年は、飢えと寒さと孤独を克服するためにラーゲリ文化(娯楽)の模索が始まり、音楽部、演劇部が生まれた。

小田桐は演劇部の中で、芝居の台本を書く「座付作者」の役割を受けた。脚本も何もない中、月1本の作品を作らなければならなかった。最初は「臉の母」に始まり、「ねずみ小僧次郎吉」「巡礼お鶴」など、義理と人情の世界を描き続け、1作ごとに作劇法を上達させたという。

小田桐は「1時間だけでも、この憐れむべき状態からみんなを解放してやるのが自分に課せられた仕事である。」と考えながら筆を動かした。後日、「道標」や自らの著作品に多くの小論文や短編小説を書くのだが、表現力の豊かさ、読む人の心を捉える筆力は、当時の座付作者としての筆の運びが影響していると思われる。

(2) 人間をみる

小田桐はここでの収容所生活を、どん底における人生の展開であり、限定状態における人間実験であった、と書いている。「こうした限定状態においてこそ、人間の実態があざやかに顕示される。一人残らず勇者の姿と怯者の姿を見せた。その時大事なことは、仲間と共感しあう寛容の精神“である。自分は仲間以上でも以下でもないこと、仲間は自分以上でも以下でもないことを知り尽くした。」

小田桐はこの憐れむべき状態の中でも“人間は生まれながらにして、尊敬すべきもの”という強い信念を得る。このことが私を勇気づけてくれたと懐想している。

同じカルガンダで抑留生活を送った詩人の石原吉郎は「石原吉郎詩文集」の中で、次のように述べている。

「収容所生活は、徹底して“人間性を喪失していくもの”であった。私は、脱人間的な環境を通過

することによってペシミズム(厭世主義)に結局到達した。(中略)強制労働により、人間として失ったものは大きすぎた。帰国後1年間は、精神は荒廃したままであり、およそ理由のない猜疑心と、隣人に対する悪意に悩まされ続けた。」

小田桐は、極限状態での人の生き方に、ゴーストキー<どん底>の人間賛歌の科白「人間！

これは一立派だ。実に誇らしく響く」を思い起こす。一方、石原は、ひとの中に「人間不信」を見る。後に、小田桐の精神における太い柱として残る「ヒューマニズム」の精神は、このような環境の中で根を張り育てていったと考えられる。

5 弘前高等学校にて(1)

小田桐は、弘前に2度の大きな帰郷を果たしている。

一度目は1944年3月で、文藝春秋社を退職し、東亜連盟津軽分会の運動強化のためである。この時、母校弘前中学校に勤務し、郷土の人材育成に夢を持って教育家として、また思想運動家として活動した。

二度目は1949年10月で、シベリア抑留を終えて帰国したときである。学制改革により、弘前中学校は弘前高等学校になっていた。復職というかたちをとり、ここでは社会科教師として生徒の指導に当たった。

生徒たちは、当時市内で上映されていた映画の題名「帰国(ダモイ)」からとった“ダモイ”を、小田桐先生の渾名として献上した。以来、生徒は親しみを込めて“ダモイ先生”と呼ぶのだが、地獄のような収容所生活を経てやっと帰国した抑留者の小田桐にとって、この渾名は複雑な思いを抱かせるものであった。「抑留中、我々はどうなにもわくわくしてこの言葉を口にしたことか。その閉塞の格子から自由になるために、命をすり減らしてきたのだ。しかし、どうしてもダモイから逃れることができないなら、いっそこいつと親しもうと考えた。それに、シベリアでの体験を教育の世界で生かす義務もあった。」

小田桐は「石の言葉—渾名」の中でこのように

小田桐孫一の思想（3） —教育思想の変遷—

述べ、一生“ダモイ先生”として生徒の中に溶け込もうと決心する。

（1）ハタの象徴

「道標」は、東亜連盟運動の機関誌として、1949年2月から津軽地区で刊行されていた。帰国後の小田桐はシベリア抑留直後の荒れた心、目の当たりにした日本の姿に対する失望の心をぶつけるように、「道標」に「真木公平」のペンネームで精力的に次の4つの短編小説を書いている。

① マホルカ、② 碑銘、③ ナターシャ、④ ハタ

この中の「ハタ」は、教師である復員者「謙吉」が、教室で生徒達と向き合う姿を描いている。正規の授業を35分で切り上げ、残り15分を生徒が自由に話し発表し合うことのできる談話会に充てるのが謙吉の授業スタイルであった。その日謙吉は、「象徴という言葉について考えよう。」と提案する。

「今聞こえるあのピアノの音は、何の象徴？」と謙吉は問う。生徒からは「寂しい音の象徴！」「あさましい音の象徴」など様々な発言が出る。長髪の生徒の一人が「向こうの家の軒下に掲げている“日の丸の旗”は、何の象徴」と聞く。一瞬シーンとなる中、長髪の急進論者は語る。「あの旗は、いうまでもなく軍国主義の象徴である。あの旗をひきずり下ろせ。あの旗を掲げた者に禍あれと叫ぼう。」

この呼びかけに対し、生徒たちはざわつく。これを見て謙吉はこの少年達に、この先どんな方向を与えようかと思ひ迷う。そして謙吉は、平和や戦争とかいう以前の時代に、巧智の臭わない素朴で“うぶなハタ”が家並に飾られていた日があったことを、少年達に語らねばならないと決心するのである。

「遠くの山の向こうに何かが存在している。純粹無垢のハタが存在しているのだ。この旗を、いまわしい戦塵で汚したのは誰だ。深く考えない日本人は、自国の文化の後進性と国旗の好戦性を悪者にして、いい子になろうとしている。それは小人の考えることだ。」

これが「ハタ」の粗筋であるが、小田桐は謙吉の思いを通して、日本の存在を教育の中でどのように位置づけ語ったらよいか、と悩む教師の姿を描いた。

（2）自治会の指導

シベリア抑留から帰国した小田桐は、凍りついた自分の心を溶かすように、弘高図書館でこれまでの新聞を読みながら、新しい日本の現状にどのように対処すべきかを模索する。そして、「ハタ」で描かれた謙吉の悩みを解決するように、弘高自治会の指導に精力を注いでいった。

道標で吐露した「民族のいのちの所在を、証してやりたい」という強い思いが根底にあったが、それを表面に出すことは次第に少なくなった。小田桐の思想遍歴を見ると、このことは大きな意味を持つ。つまり、これ以降、次第に小田桐は思想運動家としての活動を脇において、教育家として生徒の教育に心血を注ぐようになるのである。

1952年12月、「自治会誌（創刊号）」が発行された。小田桐は巻頭言で、人間が持てる思想を表現・伝達することは人間の本能的欲望であると発刊の意義を語り次のことを生徒に説いている。

- 1) 終戦後の連合国による教育管理は、新たな改革と理念をもたらした。「新教育」は、これまでの民族主義的國家観に批判されながらも、新たな近世精神として我々の前に立った。
- 2) 近世精神は、無限性、作用性、自己意識性から形成される。しかし、現在これを否定する動きがある。
- 3) この自治会誌が、“混沌たる現世にいかに対処すべか”を示唆するものとなることを期待する。

小田桐は、「自治会誌」が文芸作品等発表の

「交友会誌」とは理念において異なることを述べ、ここでの討論を思想育成の場と捉えて互いの思考の交流を促した。

(3) 新学風の確立

当時、高校生の自治意識が低下する中、「学習活動と自治活動は両立するか」が課題となっていた。生徒にとって学業と部活動のバランスをどうとるべきか、難しい選択に迫られていた。

小田桐はこの問題について、弘高新聞「私はこう考える」(1954年)で、次の3つのことを指摘し、この課題は学風を根底から変える必要があるほど、根深いものであると生徒に語っている。

1) 現在、生徒の多くが学習活動を中心に置き、受験準備に精を出している。この状況は、他律化した学習活動が、自律的な自治活動を侵し始めていると言える。

2) 入学した1年生にアンケートをとった結果、次の3論に分類された。

ア 原則論;2つの活動は原理的に両立する。

イ 現実論;両立はできない。特に運動部では不可能。

ウ 折衷論;文化部では両立するが、運動部では両立しない。

3) 我々はこの問題に無抵抗であってはならない。新しい方針と信条を打ち立てなければ、学園の予備校化に陥る。よって、「新学風の確立」が必要である。「新学風は如何にあるべきか」を、君たちに問いたい。

(4) 自然に還れ

小田桐は、自治会と共に哲学研究クラブの顧問を引き受け、生徒に形而上学的ものの考え方を指導した。

教え子の中に、1950年入学の長部日出雄がいた。長部は1973年、「津軽じょんがら節」「津軽世去れ節」で第69回直木賞を受賞している。そして2002年、「桜桃とキリスト—もう一つの太宰治伝」で和辻哲郎文化賞を受賞した。長部の恩師小田桐孫一の尊敬する恩師の和辻哲郎を顕

彰する賞を、受賞したのである。

和辻—小田桐—長部が、太い線で結ばれたことに、3人の“ものの見方、思考の深め方”の共通性を見る思いがする。

1) 長部は高校時代から、傑出した文才を発揮した。

弘高新聞(1950年10月)に「長部記者第1位に」の記事が掲載されている。この年開催された「県下学校新聞記者コンクール」に、1年生ながら弘高代表として出場した長部が、20校余りの記者の中から第1位に選ばれたのである。この大会は、記者たちが県知事室で、ときの津島文治知事と共同会見をし、直ちにそれを記事にして審査を受けるものであった。津島文治は太宰治の兄である。

2) 1952年発行の自治会誌に、長部は小論「伝統と創造」を書いている。「今の伝統は、弘前中学校時代の校風を継続した“単純再生産”にとどまっている。今こそ自発性を重んじる新教育の精神で、校風の“拡大再生産”を行うものでなければならぬ。」と訴えた。

長部の現実を批判的に見直し、将来に向けた学校・生徒の在り方を厳しく問う姿勢は、小田桐の目指す方向に沿ったものであった。

3) 小田桐は1982年7月、71歳で逝去された。その葬式において、長部は教え子を代表し弔辞を述べている。

『「自然に還れ。」』黒板に書かれた先生の文字が目に残っています。ルソーはこの言葉に失われつつある人間の本来の姿への回復への願いをこめており、先生の理想もそこにありました。その教えは、一貫して変わりませんでした。『社会契約論』『エミール』などルソーの作品の内容を、噛んで含めるように説いてくれました。その教えは、常に北を指す羅針盤のように、悩みの多い我々の航海にとって、生涯変わらぬ指針でした。困難な世を生きる我々への教えのため、我々とともに生き続けて下さい。』

長部のこの弔辞は、小田桐の教え子たちの心に浸みる感動的なものとして残っている。

6 弘前市立実業高等学校にて

(1) 新校風を創る

弘前高等学校で教頭を命じられ、学校運営の一端を経験した小田桐は、1960年4月、弘前市立女子高等学校と弘前商業高等学校を統合した「弘前市立実業高等学校」の初代校長に任命された。両校とも数十年の歴史を持つ。

2つの異なった校風を引き継ぎ、新しい校風を創るという難しい仕事に取り組むことになった。

地域の要望を受けて「実働する中堅実業人の育成」を中心目標に据え、次の2つの言葉とそれが持つ思想を「建学の精神」として打ち立てた。

① 「生命と価値」

1960年4月に行われた「第1回入学式」の式辞で、スイスの作家・思想家・教育家であるカール・ヒルティが、ベルン大学の学長就任演説で述べた言葉から、小田桐が「生命と価値」の言葉をかたどり、この学校の教育精神に据えた。小田桐はこの言葉を、3つの方向で語っている。

1) カール・ヒルティの目指した方向

ヒルティは、この大学の学風を次のように創りたいとした。

ア 国防上、最重要な城よりも一層重要なものがあること。

(軍事力より強い精神力の育成→「価値」)

イ どのような場合でも、敗れることのない城であること。

(信念に裏付けられた永遠の歴史→「生命」)

ウ どのような国に対しても、敵対的な思いを抱かせないものであること。

(他からの深い敬愛)

2) 学校の目指す方向

ア 生徒が選んだこの学校は、生徒の性格に合ったものとして、また社会の求める実働する中堅実業人を目指すものとして、その「価値」を見出さなければならない。

イ 今後長く続く学校の「生命」・歴史を、今から創り上げようとする気概を持たなければならない。

ウ この学校が、生徒の「生命と価値」を高められるだけ高めるため、どのように経営され、機能すべきか、生徒と共に考えていきたい。

3) 生徒の目指す方向

ア 豊かな人間性と強い信念を持った中堅実業人を、目指すべきである。

その人の価値は、社会が評価する。

イ 一人一人の生命力を十分発揮して、目指す人間像に向け、積極的な努力を続けなければならない。

ウ 生徒は自分相応の「生命と価値」があることを信じ、その実現のため何をなすべきか考えなければならない。

② 「歩歩清風」

1963年1月、小田桐は「中央体育館落成記念式」において、新築なった体育館の正面に「歩歩清風」の額を掲げた。そして、この学校の教育指針の一つとなるこの言葉について次のように語った。

1) 額を掲げた理由

ア この殿堂における修練は、心技両面にわたって真剣なものであること。

イ 自らの養心・養体の道を切り拓くこと。

ウ この額を仰ぎ見て日々の修練を積み、これを学校生活の精神的基盤とすること。

2) 「歩歩清風」との出会い

小田桐は、湯川英樹の自伝「旅人」でこの言葉に会った。湯川の恩師で哲学者の西田幾太郎が「歩歩清風」の額を贈り、「歩歩清風を起こすように生きよ。」と、教え子の湯川に一本の道を与えたのである。

1962年3月の卒業式で小田桐は、長い人生航路の指標にして欲しいと述べ、卒業生にこの言葉を贈っている。

3) 言葉の意味と由来

「一歩歩むごとに、自分の周りに清い風を吹き起こす」という意味である。修行を積み自分の世界を切り拓いた人は、一歩一歩歩くごとに周囲に清い風を起こすものだ、という中国の故事に由来する。

1305年頃、臨済宗禅師の南浦紹明が、中国の仏教書「碧巖録」の中の唐の皇帝肅宗と南陽慧忠国師の間で交わされた問答を説いていた。皇帝の「十身調御(より優れた禅者)になる為にはどうすればよいか」の問いに対し、国師は「自分を偶像化するのは間違いである。うぬぼれや慣習にとらわれず、世俗の価値観を打ち破る覚悟を持たなければならない。」と答えた。

この問答を説いていた南浦禅師に対し、弟子の僧から「この意味は何か」と問われた。南浦禅師は「歩歩清風起」とのみ答えた。

これは「人に頼らず自分の力で一歩一歩歩いていると、その人の周りに清らかな風が吹き起る。つまり悟りの境地に至るのである。」と解される。

「歩歩清風」は、スポーツ・文化の鍛錬により一つの道を見出した人間の美しさを表す。現在この額は、生徒達に「鍛錬せよ、道を拓け」と体育館の上から呼びかけている。

(2) 弘実生に語る

③「えらい人や名高い人になろうとは決してするな。持って生まれたものを深くさぐって、強く引き出す人になるんだ。天から受けたものを天にむくいる人になるんだ。それがしぜんとこの世の役に立つ。」

高村光太郎「少年に与ふ」より

1) 天来の声

1967年2月発行の生徒会誌「まんじ」13号に、巻頭言として、この詩が掲載された。生徒自らがこの詩の良さを見つけ、会誌に掲載したことを小田桐は喜んだ。

同年発行の弘実新聞で小田桐は、えらい人や名高い人になろうとすることは普通のことであるのに、この詩ではなぜ排除しているのかについて、次のように語っている。

ア 人間はそのような人になるために、他人を蹴落したり、実力以上のものを見せようと卑しい行為をすることになる。

イ そのような人になったところで、その人は精神的に幸福なはずがない。卑しく得た椅子は、砂上の楼閣である。

ウ この詩は、本校の教育方針「生命と価値」を詩の形で詠んだようなもので、これは“天来の声”と言ってもよい。

後日、弘高校長となった小田桐は、この詩を「目指す人間像」として取り上げた。そして弘高生のために新たな意味を込めて語ることになる。

2) 高村光太郎にみるヒューマニズム

1943年、高村光太郎は年少者のための詩集「をぢさんの詩」を刊行し、詩「少年に与ふ」はこの中に収載された。

しかし、この詩が作成されたのは1937年で、詩集「無風帯」に一度発表されている。詩人の平田内蔵吉は「この詩には技巧らしい技巧もなく、無理な繕いもない。真直に天に向かう杉のような詩で、素直な心が謡われた格調のある作品である。」と評している。

高村光太郎がこの詩を作った1937年当時は、生活面でも安定し、気力の最も充実した時期であった。この後、高村は戦争詩人と呼ばれる詩作の期間に入るのだが、この詩はそれ以前の作品であることに留意する必要がある。

小田桐は、高村光太郎が子どもたちに託した、ヒューマニズムに満ちた高い理想を持ちまっすぐに育ってほしいという願いに感動したのである。

④ 「自由と規律」

1962年1月、小田桐はロングホームルームでの講話において、「自由と規律」について語っている。自由は大事な活力源であり、規律は羅針盤でなければならないと話す。

ア、慶應義塾大学の池田潔は、著書「自由と規律」の中で、英国での自らの体験を通して「個人の自由は最高度に尊重されつつ、しかも規律と

小田桐孫一の思想（3） —教育思想の変遷—

いうものに対して黙々と服従しているのも事実である。」と紹介している。

イ、自由とは、無拘束、無批判に何をやってもよいことではない。規律と共にあって自由は生きる。例えば“車は左、人は右”などは、社会を円滑に進めるための規律である。

ウ、規律の裏に、“人に対する深い配慮”があることを忘れてはいけない。学校における規律の裏には、人を正しく育てたいとする教師の教育愛がある。

このテーマは小田桐にとって、弘高教員時代から生徒と向き合う時の課題となっていた。

後日、弘高校長として復帰した小田桐は、教育方針の重要な柱「努力目標」に位置づけその意味の深さを語っている。「自由ある規律は、人間を健全にする。規律ある自由は、人間の行動を正しく導く。」

⑤ 「照于一隅」

弘実生徒会誌「まんじ」12月号（1966年2月）に、小田桐は「照于一隅」と題して、生徒に語りかけている。

1) 意味するもの

「照于一隅」は“しょういちぐう；一隅を照らす”と読む。

自分が住む世の中のほんの一隅でも明るく照らすことが、人間として非常に大事だということを意味する。つまり、自分の命に適した職業を選び、いつもそれに生きがいを感じて勤勉に実働し、職場の仲間や隣人と相睦み助け合いながら生きる、ということが真意である。

2) 最澄の教育目標

この言葉は、818年頃、最澄が学僧たちに示した学則「山家学生式」の中に出てくる教育目標ともいうべき言葉である。もともとこの言葉は、中国の齊の威王が言う「径寸十枚是れ国宝に非ず、一隅を照らす、此れ即ち国宝なり」に由来する。最澄は、道心（仏道を信ずる心）を持って明るく

一隅を照らす人が国の宝である、と弟子に説いた。

小田桐は、最澄以来千年経った今でも、この言葉は生きているという。“径寸十枚是れ国宝なり”の風潮がある今の常識を正さなければならぬ。「照于一隅」のいう清水のようにすがすがしい人間の生き方を追求しなければならない、と訴えた。

なお、「于」(う)については、「干」(かん)、「千」(せん)などの説があるが、天台宗勸学院では、助詞の「于」(う=～において)を用いている。

7 弘前高等学校にて（2）

1968年4月、小田桐は弘前高等学校長として、以前勤務した学校に異動した。自分の母校でもあるこの学校において、4年間学校経営を行うことになった。転勤後の気持を磁気テープに次のように記録し残している。

「私は後ろ髪を引かれる思いで弘前実業高校を去り、もと居たことのある弘前高校へ舞い戻った。8年間の歳月は相当強い力を持っている。現在の学校もかなり変貌し、様々な問題がある。これらの問題を4年後の定年退職の日までに、スピーディに解決しなければならないと思う。

もと居た学校で生徒から“校長らしくない校長”と言われたが、“校長らしくない校長“ぶりを今の弘高生に示すために、いつか小田桐節でも歌って聞かせてやろうと考えている。」

この後で、ペギー葉山の“南国土佐をあとにして”の替え歌“北国津軽をあとにして”を、こぶしをきかせながら歌っている。

元鏡ヶ丘同窓会長の竹内重夫は、小田桐の校長としての4年間について「新風を吹き込んだ不拔の情熱は大きく、弘前高校の“中興の祖”である。」と評した。

（1）新風を吹き込む

①「持って生まれたものを深くさぐって強く引き出す人」

弘前高校に転勤した2年目、校長として教育方針を示す中で、「目指す人間像」としてこの言葉を掲げた。これは弘前実業高校において、生徒に望ましい生き方を語るとき引用した高村光太郎「少年に与ふ」の詩の一部である。なぜこれを弘高における「目指す人間像」としたか、その理由を、次のように述べている。

ア、少年の修行は、自己充実の決意を固めることが第一である。
イ、充実した自己の力を発揮することが、本来的に「この世に役立つ」ことになる。
ウ、この詩は「えらい人や名高い人になるな」と言っているのではなく、「なろう」として、排他的、利己的、非人間的になることを戒めたものである。
弘実校、弘高校の生徒に対し、目指す方向はそれぞれ違っていても、人間として真直に伸びようと修行する姿、他人に対し愛惜の心を持つ姿は大切なことだ、と訴えた。

② 「誰人天下賢」

この言葉は、陸羯南の五言詩の中の一部である。

「名山出名士、此語久相伝、
試問巖城下、誰人天下賢」

陸羯南は、郷土が輩出した言論人で、新聞「日本」を創刊し、日本の言論界に異彩を放った人である。この詩は、郷土の青少年に向かって「天下の賢を志し、日々努力せよ。」と呼びかけたものである。

1968年11月、弘高創立85年の開校記念日に合わせて、体育館に扁額「誰人天下賢」を掲げ、その意味を次のように生徒に語った。

1) 村上鬼城「生きかわり死にかわりして打つ田かな」の句は、農民の生活を冷厳に詠んだものである。この学び舎で学ぶ人も、生きかわり死にかわりしながら、学校の歴史を造ってきた。県下唯一の中学校に各地区の俊秀が集まり、天下の賢を目指したのである。

2) 羯南が求めた天下の賢に足る人物とは如何なる人か。いかに社会的地位が低くとも所得が少なくとも、高い倫理性を持つ人間であることをいう。

例えば、高村光太郎の詩に描かれる「持って生まれたものを深くさぐって〜」の人間や最澄の「一隅を照らす人」がその一人であろう。

3) この学校の先輩は、養生の人であった。欧米先進国の文明と文化を我がものにするために、食欲なまでの学習意欲をもって学びとった青少年たちであった。

しかし日本は、アジアの一隅を照らすべき立場にありながら、アジア全体を曇らせてしまった。今世界平和が強く望まれている。この国を、世界にあって一隅を照らす国に作り変えねばならない。背骨のしっかりしたナショナリズムを組み立てよ。背骨のしっかりした自己確立を目指せ。

小田桐は、弘実生徒会誌「まんじ」14号(1968年)にも、校長の言葉として「誰人天下賢」を掲載している。

ここで小田桐は弘高生に対し、特に、視点の世界に向け、社会に甘んずることなく自らを律する姿勢を強く求めている。「学校の歴史は、長いからといって尊いのではない。長い道程の中に、読もうとすれば読める里程標があるから尊い。『誰人天下賢』は、風雪に耐えた里程標なのである。」

(2) 弘高生に語る

③ 脳幹を鍛えよ

小田桐は弘高生に対し、知識の向上を図るだけでなく、人間としての知性の向上を重視するよう働きかけた。

そのため、生理学者時実利彦の『脳の話』を引用し、「第二の啓蒙時代」の重要性を語っている。時実によると、人間の脳は次の3つの部分で組み立てられているという。

小田桐孫一の思想（3） —教育思想の変遷—

ア、大脳辺縁系； 欲情を生み出す部分
イ、大脳新皮質； 理性や知性を生み出す部分
ウ、脳幹 ； 惻隠の精神を生み出す部分

小田桐は、生徒に印刷物「第二の啓蒙時代」を配布し、脳幹を啓蒙することによって、互いの生命を尊重し、愛惜する心を持つことの大切さを強調した。

1) 啓蒙とは何か。

育っていない「蒙」(悟性や理性)を、育つように「啓」いてやること。

2) 人間の蒙は次の3段階で開発される。

ア、自然状態；大脳辺縁系の時代で、欲情に支配されて生きる段階。

イ、第一の啓蒙時代；大脳新皮質開発の時代で、知性等を使用して、未開発状態から脱出する段階。

ウ、第二の啓蒙時代；脳幹開発の時代で、相互の生命を尊重し、愛惜の心が相互に育つ段階。

3) 子供時代から第二の啓蒙開発を重視した教育を行い、「他人への思いやり、優しさ、謙虚な自己反省を身に付けさせること」こそが、現代教育の最大の目標である。

④ 内発性の問題

1971年12月の始業式で小田桐は、夏目漱石「現代日本の開化」(1911)を引用し、日本社会の進むべき方向、我々の進むべき方向について語っている。

1) 漱石の言葉

西洋の開化は内発的であり、現代日本の開化は外発的である。内発的とは、内から自然に出て発展するという意味であり、外発的とは、外から加わった他の力で一種の形式を作る意味である。この意味から、日本の開化は皮相的で上滑りの開化であると考ええる。

2) 日本の生き方

「現代日本の開化」の問題は、これまでの外発性から新しい内発性への転換を自覚することに

ある。今は、後の鳥(日本)が先の鳥(西洋)の前に立つ歴史的時点にある。

3) 我々の生き方

ア、模倣性からの自由—「流行」に眩惑されないこと

イ、形式化からの脱皮—内容を深めるよう努力すること

ウ、不消化の治療法 —基本的なことをつかむこと

小田桐は生徒に対し、原点にしっかり足を据えて、前へ一歩を踏み出すことが大切だと呼びかけた。

⑤ チップス先生に学べ

小田桐は、英国の作家ジェームスヒルトンの「チップス先生さようなら」から、教師の生き方、人間の生き方を学べと語る。この本では、英国のパブリックスクール「ブルックフィールド校」の教師であったチップスについて「立派ではあるが、(社会的あるいは学問的、いずれの点からみても)格別優秀という人物ではなかった」と描かれる。若いときは一度立身出世に燃えたときもあったが、それもかなわぬと悟ると、一教師としてこの生徒と暮らすことに無上の喜びと生甲斐を感じ始める。ユーモアと洒落を利かした授業が生徒の心をとらえた。そういうチップスが、何千人もの小さな魂どもにとって、終世忘れえぬ人となることは立派なことである、と言う。

1) 生徒に対して

1972年3月、卒業式の式辞で、チップス先生の生き方を人間として最高の生き方であると示し、定年退職を前に卒業生に対し最後の授業として、約30分にわたり壇上から語った。

ア、チップス先生の生き方は「人の生を長閑にし、豊かにする」ものであり、人間として最上の生き方である。

イ、この生き方は、「一隅を照らす人」「天下の賢」「持って生まれたものを深くさぐって～」に

つながるものである。

ウ、自分は退職後も、チップス先生の求めたる
ところを求め続けたい、と願う。

2) 教師に対して

1960年10月、教師に対する研修会で「古くて
新しい教師像」と題して講演を行っている。

教師は子供たちとどう向き合うべきかについて、
チップス先生の生き方を通して述べた。

ア、次元の高い人間観を土台にして、子供た
ちを大切にし、彼らを愛することである。

自分の幸福と生徒の幸福を結び付ける教
師であることが重要だ。

イ、この世は濁世である。よって、濁世の風雨
が子供の行く手を阻むとき、子供はわき道
にそれる。未完成の魂を本道に戻すため、
濁世の風雨と敢然と対決するのが教師の役
目である。

ウ、教師は厳しくなければならない。子供の弱
点を見逃してはならない。子供に、自・他・
無差別の物の見方を教えなければならない
い。

世の教師は、何分の一かチップスでなければ
ならないし、また自らなろうと努力しなければなら
ない、と語る。

8 藤崎町教育委員会にて

1977年9月、藤崎町町長から請われた小田
桐は、1982年5月までの4年余りを、藤崎町教
育委員会教育長として勤務することになった。こ
の間「広報藤咲」に、97回にわたって「随心ノー
ト」と題し、教育管理者として子供や父母に伝え
たいこと、自分が経験したこと、教育関係者に残
しておきたい自分の夢などを連載した。後日、こ
れらは逝去後の一周忌の際、遺稿集「随心ノー
ト」として町の教育委員会有志の手で刊行されて
いる。

教育管理者(教育長)として、小中学校生や父
母に向き合うとき小田桐は何を語るのか、教育
思想の変遷を見る上で興味のあるところである。

いくつかある中から、次の3つの主題に注目し

たい。

(1) 落ちこぼれ

随心ノートの冒頭で取り上げたテーマである。
当時、流行語の一つにまでなった「落ちこぼれ」
を厳しく指弾する。教育関係者に対し、子供の
本質を見失うことなく、大切に育てる必要がある
と語る。

「子供に当てはめてこの言葉を乱発することを
私は嫌う。頭の回転の早い子と遅い子があること
は事実だけれども、なぜ後者を落ちこぼれなどと
呼ばねばならないのか。かつてペスタロッチが
『王座の上にあっても木の葉の屋根の蔭に住ま
っても同じ人間、その本質から見た人間、そも彼
はなんであるか』と言った。人間をこの本質から
見る場合、人の子に落ちこぼれなどあるわけは
ない。また誰にも、人の子を落ちこぼれなど言
う資格はない。」

(2) あすなろの歌

ヒバをあすなろと呼ぶ習俗は、古くからあった。
それはヒバがヒノキより劣っているという考えから
くる。小田桐は、萩原井泉水の一文「ヒバの木は
ヒバの木で好い。ヒノキになる要はない。もっとも
ヒバはヒバラしく、その木の本性に随って成長し
なければならない。」を引用し、人間教育の在り
方を説く。

「ヒバに似た子を、ヒノキに似た子に育てるの
が人間教育の主眼だと考える人間がいる。これ
は誤りである。どちらの子も、その本性に随って
成長し、自分の持って生まれた最良のものを表
す状態になり得たときには、人間としての価値は
常に等しい。このような人間価値観の大転換が
大切である。」

(3) 頭出す子も出さぬ子も

自作の俳句「啓蟄や頭出す子も出さぬ子も」を
示しながら、受験期の子供について、受験する
子供の将来を見守ってほしいと父母に語りかけ
る。

小田桐孫一の思想（3）
—教育思想の変遷—

「人間の価値は学校の種類によって決まるのではない。どんな学校に入っても、入ってからどんなことを、どのように真剣に学ぶかにある。戦後の日本では、難関の一流大学を選び、入学後は“遊び型”に転落してしまい、本末転倒である。これからの日本は、経済大国より道義大国を目指し、他人のことを思いやり、父母のために尽くす人間として自立することが大切である。」

9 思想を残す

小田桐には二人の恩師がいた。和辻哲郎と石原莞爾である。

和辻からは、大学での講義や「ニーチェ研究」「風土」を通して、哲学観、ものを考える手法を学んだ。石原からは、「東亜連盟思想」を通して、世界観、人間社会の在り方を学んだ。

「和辻倫理学と石原戦争学の結合的展開というテーマが、私に残された唯一の課題である。」

弘前高等学校を退職後自宅にこもり約5年間、これまでの生き方を振り返るように、著書「鶏肋抄」を執筆し、同人誌「道標」に思想を書き、新聞等に教育評論家として教師生活から学んだ教訓を残そうとした。

（1）「道標」に残す

1)「高士—佐藤正三さんのこと—」(1978)

道標は東亜連盟運動の機関誌であるが、編集者の交代、編集思想の違いなどから、第1次道標、第2次道標、第3次道標の3つに区分される。

小田桐は、第1次の「マホルカ」(1950)から、第3次の「高士—佐藤正三さんのこと—」まで、約30編の小論を発表した。佐藤正三は、東亜連盟思想を最初に小田桐の心に持ち込んだ思想形成上の先輩である。

また小田桐は、東京都に本部を置く東亜連盟同志会の機関誌「共和党」の論説を担当し、「石原莞爾の眼から見た現代批判」について、31回の連載を行っている。

2)「どう生きていいか—菊池正英君と私—」

(1975)

1974年秋、弘前市長選挙が話題となった。東亜連盟運動の同志菊池正英が立候補することになり、小田桐はその最高責任者として支援した。「弘前市を、農工一体による田園都市として建設する。」という、東亜連盟運動の思想を具体的に推し進めようとする気持からであった。

選挙の結果は、菊池の敗北で終わった。その後、小田桐は社会から距離をおくように、隠遁生活の中で、石原莞爾の思想研究に精力をそそいでいく。

（2）「教育みちのく章」に残す

小田桐は市長選後、東亜連盟思想について表立って語ることは少なくなった。道標へも「高士」を最後に投稿を止めた。その代わり、新聞にこれまでの教師としての経験や意見を述べる教育評論の投稿が多くなっていった。

東奥日報には、逝去される1982年7月までの間、教育評論3編、「教育みちのく章」に6編の小論を書いた。

1)教育評論

- ①少年の非行化に思う—無道大国が因—
- ②小さな王国を読み返して
—自信を失った教師—
- ③有償と無償の愛—教育の荒野を超える—

2)教育みちのく章

- ①生かそう学校裁量—規格化でまた逆戻り—
- ②表裏一体の関係—分化は荒廃を招く—
- ③子供は教師を選べぬ—誠実な仲間意識を
持て—
- ④偏見から目覚めよ—人生の目標、子供らに
- ⑤工夫欲しい教え方—愛と細心の心配りを—
- ⑥授業に必要な要素—「間」の問題—

（3）遺稿「授業に必要な要素—『間』の問題—」

1982年7月26日、「教育みちのく章(第28回)」に「授業に必要な要素—『間』の問題—」が掲載

された。

逝去された8日後であり、これが小田桐の遺稿となった。

久保田万太郎の戯曲「大寺学校」の脚本の中で扱っている「間」の重要性を取り上げ、芸術における「間」は、作品の成否を決するほど不可欠な技法であると主張する。そして、この「間」の論理を授業に当てはめ、次のように述べる。

1) 子供の応答がすぐに得られない場合、教師はそれを待たず直ぐ正解を示すのは愚行であり厳に慎むべきである。

子弟は順態接続詞(だから、したがって、ゆえに、…)と逆態接続詞(しかし、だが、けれども、…)を通して問答する。子供の順態に対して、教師は逆態をもって追及していく。そこに「やや長き間」、沈黙が続き、教室は無音の空間になる。子供が最も混乱し、最も思考するのはこの瞬間である。

2) 子供が学力を本当に身に付けるかどうかは、充実した沈黙の時間にある。混沌とした思想を形あるものにするための言葉を模索し、否定と肯定を繰り返しながら決定に至る対話なのである。

3) 現行教育はこの「ゆとり」を容易に与えてくれない。落ちこぼれ多発の我が教育界がこの荒野を克服できるか、「授業における間の取り方」が大きな教育課題の一つである。

小田桐は、逝去される直前まで、入院するベッドの上で教育に関する原稿を書いた。教え子の雨森輝昌先生が、それを東奥日報社に持ち込んだ。

長く連載する予定であったようで、この原稿もその一部であり、教育課題解明の思索はまだまだ続くという小田桐の強い意志が表れている。子供を中心に据え、子供の深い思考を促す教育の在り方を最後まで模索し続けた、教育家小田桐孫一らしい文章である。

10 おわりに

(1) 魂を揺さぶる感動

2018年7月、筆者は長部日出雄さんから書簡をいただいた。小田桐の肉声を記録したCDを贈ったことに対する礼状である。長部は大変喜び、次のように書いてよこした。

「教育者としての識見や信念を満載した卒業式の演説などに感銘を受けたのはもちろんだが、とりわけ私の心に深く染み込んだのは先生の歌声であった。『北国津軽を後にして』の歌は、小節がよく回る独特の“小田桐節”の魅力が絶妙で、実に素晴らしい。

～歌と演説の相乗効果が醸し出して魂を揺さぶる感動は、近来稀なものである。」

薫陶を受けた多くの教え子のなかで、自分の思想を強く引き継ぐ長部の存在は、小田桐にとって最もうれしいことのひとつであったに違いない。

(2) 田園都市構想

2012年2月、弘前市は「弘前圏域定住自立圏共生ビジョン～子どもたちの笑顔あふれるまち～」を策定し公表した。これは約40年前、小田切達氏が市長選挙に当たって提唱した田園都市構想の実践版ともいうべきものである。東亜連盟運動の掲げる3原則「大都市解体、農工一体、簡素生活」に基づき、弘前市と近隣市町村が農工一体による田園都市作りを目指すべきであると主張した。東亜連盟の思想が現実の施策として動き出したことに、意義深さを覚える。

(3) ほんとうの人間

小田桐は、学びとった世界観と、経験から身に付けた人間観を合わせた独自の「教育観」を打ち立てた。

東亜連盟思想→世界観→社会改革 シベリア抑留→人間観→人間育成	} 教育観
------------------------------------	-------

小田桐孫一の思想（3）
—教育思想の変遷—

整理してみると、文藝春秋社時代に学んだ東亜連盟思想から、石原莞爾の目を通した世界観を、「社会改革」に生かそうとした。

シベリア抑留で経験した人間の極限状態を見た目から得た人間観を、「人間育成」の原点と考えた。この二つの要素が相乗的に補完し合い、厳しくも優しい、未来を見据えた教育観を生み出したと考えられる。

後年、小田桐は弘高新聞に山村暮鳥の詩「人間のうた」を掲載し、そこに描かれた一人の老いた漁夫の姿一海を愛し、海によって鍛えられ、海と一つになって生きる一、寂然と毅然と渚に立つ枯れた姿を示し、これが「ほんとうの人間」の姿である、と生徒に語っている。

小田桐は、評論「少年の非行化に思う」の中で、一人の非行少年が何気なく発した『何のために勉強するのか』という問いを重視する。

そしてこの問いに対し、教師はどう答えるのか悩まなければならない、と課題を投げかけた。

この老いた漁夫の寂然と毅然と渚に立つ枯れた姿こそが、その答えを与える一つのヒントになるのではないかと考えている。

【小田桐孫一略年譜】

- 1911年 弘前市撫牛子村に生まれる
 1924年 青森県立弘前中学校へ入学
 1928年 官立弘前高等学校文科へ入学
 1932年 東京帝国大学文学部倫理学科へ入学
 1936年 国立多摩少年院補導員として勤務
 1937年 文藝春秋社へ入社
 1944年 3月、文藝春秋社を退職、帰郷し弘前中学校に勤務
 10月、応召により満州電信第一連隊へ入隊
 1945年 カザフスタン共和国で抑留生活

 1949年 9月、復員。新制弘前高等学校に復職

- 1959年 弘前高等学校教頭へ
 1960年 市立弘前実業高等学校初代校長へ転出
 1964年 「石の言葉」発行
 1966年 「風塵抄」発行
 1968年 弘前高等学校校長へ転出
 1971年 「草沢の心」発行
 1972年 弘前高等学校退職。「鶏肋抄」発行
 1977年 藤崎町教育委員会教育長に就任
 1981年 弘前市立病院に入院
 1982年 教育長辞職。7月18日永眠、71歳

【引用・参考文献】

- 1) 小田桐孫一「石の言葉」あすなろ会（1964）
- 2) 小田桐孫一「風塵抄」あすなろ会（1966）
- 3) 小田桐孫一「草沢の心」鏡陵刊行会（1971）
- 4) 小田桐孫一「鶏肋抄」鏡陵刊行会（1972）
- 5) 遺稿集「随心ノート」藤崎町教育委員会（1983）
- 6) 同人誌「道標」（1949 - 1982）
- 7) 「月刊東奥」東奥日報社（1944）
- 8) 「教育みちのく章」東奥日報社（1981）
- 9) 生徒会誌「まんじ」弘前実業高等学校（1963）
- 10) 式辞集「第1回入学式」他、同上（1960）
- 11) 創立100周年記念誌、同上（2019）
- 12) 「自治会誌」弘前高等学校（1952）
- 13) 「弘高新聞」同上（1970）
- 14) 「石原吉郎詩文集」講談社（2005）
- 15) 高橋信進「小田桐孫一の思想(1)」東北女子大学紀要（2007）
- 16) 高橋信進「小田桐孫一の思想(2)」東北女子大学紀要（2009）
- 17) 小田桐孫一「CDファイル」（2019）